

Title	マルセル・プルースト序説：語り調査を基に
Sub Title	Marcel Proust : An introduction
Author	森, 昌巳(Mori, Masami)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.147(26)- 159(14)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルセル・ブルースト序説

— 語い調査を基に —

森 昌 巳

ブルーストの三作品、『失われた時を求めて』、『サント＝ブーヴに反駁す』、『ジャン・サントゥイユ』（『楽しみと日々』）を制作順とは逆に考察してみたい。それぞれの作品のもつ特色、主に、詩的美と主人公について、語い調査（頻度数の表は不完全のため略）の助けを借りつつ、私見を述べよう。

I. 『失われた時を求めて』

1. レミニサンスと時間

周知の如く、レミニサンスはブルーストの特色である。その多くの例に「不意に」(Tout d'un coup, tout à coup, brusquement, etc) という副詞が使われる。

... ainsi, tout d'un coup, je me reconnus, au milieu de cette musique nouvelle pour moi, en plein sonate de Vinteuil.⁽¹⁾

Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu.⁽²⁾ (マドレーヌ菓子挿話の場合。)

作者はレミニサンスによる喜びを作品の随所に亘って巧みにちりばめた。つまり、Tout d'un coup は小説上の一技巧であって、場面転換の役目を果たす。不意に、今迄語られてきた物語の時間にブレーキがかかり、読者は異った次元に運ばれる。レミニサンスに於ける Tout d'un coup の用法は、主人公にとってオアシスであると同時に、読者を驚かさず目覚し時計のショックという仕掛けになっている。

又 re ——(再び)の接頭語に始まる動詞が多く使われるのは、時間の反復性から生じる ennui を示し、レミニサンス以外にも使われる tout d'un coup の効果を強めている。

「真夜中の目覚めに伴う寂しさ」や「町中で迷子になる」という表現は、世界から隔絶された孤立感を意味し、G. Poulet のいう場所の喪失感に連るのだが、空間、時間の⁽³⁾

復権は「心の間歇」での祖母を見る夢の場面にみられる。

スワンが見る夢は象徴的な暗示を与える。「私」が見る夢では女性の顔がデフォルメする例が幾つかある。⁽⁴⁾ 時間に伴う女性の顔の衰えの前ぶれとして描かれる様だ。但し多くの夢は解釈出来ない。プルーストは夢を説明出来ないもの、非合理的なものとして描いたのであろう。だが夢の描写は「もう一つの眠り」のように、時間からの脱出を目指している。

年代記風の『ジャン・サントウイユ』と違って『失われた時を求めて』には物語の時代とか、主人公の年齢は意識的に明らかにされない。しかし、『スワン家の方へ』や『花咲く乙女達の蔭で』には、お正月、クリスマス、復活祭の休み、夏休みといった幼少年期の魔法の日々だけは記されている。これらの休暇の日々は少年にとって、普通、喜びとなる日であるはずなのに、かえって ennui を感じてしまうことによって、時間のもつ、むなしさが強調される。怠惰性、無用性、悠長さは時間に対する反逆であるかのようにプルーストのヒロイン達や自然界の一特質となり、彼女らの美を形成している。

「怠け者の美しすぎる空」 le ciel paresseux et trop beau⁽⁵⁾

「田舎の太陽の脂ぎった、だらけた金色」 l'or paresseux et gras d'un soleil de province⁽⁶⁾

「スワン夫人の暇そうな微笑」 un sourire oisif de Mme Swann⁽⁷⁾

「きんぼうげの無用の美しさ l'inutile beauté des boutons d'or⁽⁸⁾

以上の修飾語は時間が停止したかのような田園生活の、のどかさを、或は、サロンでの無時間的な社交に一致する。寶石など美しい物の無用性については、J. Ruskin も The Stones of Venice の Saint Marc の章で述べている。⁽⁹⁾

2. 詩 的 美

『失われた時』の詩的美は、自然及び女性を前にした孤独な「私」の部分に集中する。巻で言えば『スワン』では、コンブレ、パリのボワの箇所。『乙女』ではマダム・スワンのサロン及び、バルベックの海辺。『ゲルマント』のパリの郊外及びドンシェールの景色、『ソダム』の「心の間歇」或は『囚われの女』の部屋、散歩。『見出された時』の「ゲルマント太公夫人のマチネー」等。

モラリスト的省察、感情の分析は詳細すぎる。サロン描写も、しゃれた会話、こっけいな場面があるにせよ、やはり、この作品の美しさは「私」のモノローグ、それに、女性や自然についての綿密な描写に存する。

『花咲く乙女』にゴンクール賞が与えられたのは理由のあることだ。他の『スワン』、

『囚われの女』も美しいが、前者は「スワンの恋」、後者は後半の嫉妬の詮索の部分が見劣りする。パリ篇とバルベック篇からなる憧憬期の『乙女』は両篇ともすぐれている。

A. Feuillerat によれば、1913年『スワン』出版後戦争のため、次巻『乙女』は出版が遅れ、五年の余裕のある間に、⁽¹⁰⁾ 推敲され、質量ともに豊かになった。

(i) スワン夫人

『乙女』のロマネスク味はヒロインであるスワン夫人とアルベルチーナの魅力に深い係りがある。第一部の題名 *Autour de Madame Swann* は味わい深い。この題名は1918年のN. R. F版では用いられたが、以後の分冊本には記されず、1954年の *Pléiade* 版で⁽¹¹⁾ 再生した。

主人公の少年がお小姓のようにまといつくのは、初恋の少女ジルベルトより、むしろ、その母スワン夫人の「周り」ではないか。少くとも、モードの観点からみると、マダム・スワンはエレガントなマヌカンである。作者が特に彼女の衣裳の布地について、綿密に調べ、書きこんだことは、「スワン夫人とその衣裳」という論文や、⁽¹²⁾ “*Lettres à Madame Caillavet*”,⁽¹³⁾ 或は *Lucien Daudet* の回想が示している。事実、ジルベルトに⁽¹⁴⁾ ふられた後も、第一部の物語が延々と続くのは、スワン夫人の衣裳を描くためとさえ言えよう。

彼女の生は話者の成長に対応している。冒頭幼少の「私」が逢った時の、「バラ色のドレスの婦人」から「フォルシュヴィル夫人」に変身した最終巻のマチネーに到る迄、彼女は非連続的ながら、しばしば作品に出没する。

『近代生活の画家』の中で、ボードレールは女性に対すると同程度に *mundus muliebris* (女の世界) に熱中する芸術家連について語り、およそ次のように続ける。「女性は特に姿態や手足の動き許りではなく、彼女を包む、ゆったりとした多彩な輝きをもった薄絹や紗、布地の雲集、更に、腕の周りや首につけるメタルや鉱石の、全般的なハーモニ⁽¹⁵⁾ ニである。」

プルーストはまさしく、*Baudelaire* が述べる芸術家の典型である。始めて訪れるスワン家の階段や居間には、*Combray* の花園の匂いが加工されて移されたかのように、夫人の化粧着や香水の薫が漂っている。ジルベルトとの恋物語は除々に色あせ、マダム・スワンの目まぐるしいばかりに変わるファッション姿が詩的に写しだされる。白いクレープデシンの部屋着や、明るい泡立つ波のようなワットー型の絹の化粧着、タフタ、ピロード、しゅす、のドレスは、それぞれ異った雰囲気や彼女のまわりに立ちめぐらす。時に「私」は彼女の外出着の選択を任せられ、夫人が暑くて脱いだジャケットを嬉々として持ち、袖

の人目につかぬ繊細な装飾に感嘆する。彼女が開いて差した日傘の内側の青色は、「普通の空よりも一層近く、まるく、穏かで動きがある青い空」⁽¹⁶⁾に映じる。極めてメルヘン的で、絵画的な情景が物語の脇路にばかり浮び上っている。モードがすたれるように、彼女も最終巻のゲルマント太公夫人のマチネーでは「断種したバラ」のような様子であり、⁽¹⁷⁾ぼけて衰つぼくなってしまふ。

動植物園及びボワでの、彼女の散歩をG・プレーは「エレガントな儀式」と名づけ、「この特別な儀式が他の社会生活（サロン・食堂・ホテル）の儀式のように、見物する主人公に同じ魅惑をもたらす」と説く。⁽¹⁸⁾服装のエレガンスは、プルーストの礼装好みに伺える。ゴルフをしないスワン夫人は決してセーター姿になることはないし、⁽¹⁹⁾『囚われ女』でのネグリジェ姿のアルベルチヌは主人公にとって「陰気な空」⁽²⁰⁾でしかない。しかし幾つかの書簡に見られる実生活者プルーストは、喘息持ちのためか肌着でいることが多い。女嫌いの Charlus がダンディであってプルースト自身がそうでないように。⁽²¹⁾

スワン夫人の基調色としてモーヴ色が挙げられよう。オデット(スワン夫人の前身)がスワンの前に現れるのは「絹か縞子のモーヴ色のカトレアの花」⁽²²⁾からであり、又「私の特に憶えているのは、スワン夫人の様々な衣裳の内、モーヴ色だった」。⁽²³⁾G. Matoré が調べた十九種類の色彩の頻度の内、モーヴ色は『スワン』では、十六位、『乙女』では十一位、『ソドム』では十八位と少ない部類ながら、『乙女』での第一部にふえているのは、スワン夫人の登場故にである。

(ii) アルベルチヌ

『花咲く乙女』に美しい部分を移したので『ゲルマント』、『ソドム』の巻が劣っているとプルースト自身述べている。『囚われの女』がロマネスクであるとは、G・ガリマル宛の手紙に又、⁽²⁵⁾Francois Mauriac の評にも示されている。⁽²⁶⁾

この物語の当初のプランには、アルベルチヌの挿話は存在せず、後から追加されたといわれる。が、アルベルチヌの登場は、スワン夫人、シャルリュス氏の物語とは別に、ロマンのヤマを導き出す糸口になっている。コンプレでは不在だった欲望の対象が、バルベック篇に到って真の意味で具体化された。

バルベックの海辺を闊歩する乙女らのグループへの好奇心、偶然の慣れそめ、仲間入りの描写過程に、想像力の豊かさやイメージの美しさが認められる。少女達のバラ色の頬や顔はジュラニウムや、バラやお菓子に置きかえられ、主人公の *sensualité* がダブって描かれる。

太陽の移動につれて、朝夕変化する海の様子、若々しい少女達との外出は、全体にべ

シムスティックな、この作品の中でも明るい部分であるが、プルーストの海は A. Camus に於けるように、水中に裸身を浮かせて、生を謳歌する場ではなく、ホテルの窓から遠く眺められる美しい一風景となり、青い波のふくらみのイメージはやがてナプキンの感触と共に想起されるであろう。ガラス張りの食堂が水族館に見えるのも、透明化好みと、対象に対する outsider 的な観方を示し、やがてはサロンの人々への辛らつな筆致に通じる。

アルベルチヌが最も意味をもつのは『囚われの女』となってからだ。パリを舞台とするこの巻は、陽を浴びたバルベックの海辺とは反対に、室内の電燈の下の雰囲気に近い。グループ中の一人の娘に、焦点がしばられ、召使いつきの同棲生活は、その非現実性によって、日常性を超え、人工の愛の場が設定される。手短かに言えば、怠け者の主人公は殆んど常にベッドの中に寝ているのであり、怠惰の唯一の口実は G・Brée の言う如く、「アルベルチヌの存在故である」⁽²⁷⁾。だが恋人が近くに存在するという意識、それに伴う昂揚によって、街の物売りの声、車の騒音が喜びの音楽に変ずるのだ。

アルベルチヌは話者の官能性を映すサンボルであると共に、一面では、「他者」として「私」を悩ます。彼女が登場している際、「心の間歇」及びヴァントウユのセプテットを除いて、レミニサンスの喜びは訪れない。「心の間歇」ではバルベックという同じ舞台で、夢の中の祖母がヒロインとなり、アルベルチヌは片隅に追いやられ、御機嫌斜め。ヴァントウユのセプテットも孤独なるが故の享受であって、彼女は除外される。

スワン夫人の日傘の空に対応する、アルベルチヌの衣裳の例を挙げよう。汽車で、ラ・ラスプリエールへ行く途中、グレー色の彼女がジャケットを脱ぐと、玉虫色の袖がグレイのスカートに虹がかゝったように映える。「光線のプリズムだ」と女嫌いのシャルリュス氏さえ驚く⁽²⁸⁾。細部ながら、色彩のコントラストの鮮かさは注目されよう。

アルベルチヌが「嘘つきの天才」とすれば、主人公は嫉妬疑惑の天才である。彼女のイメージはバルベックの海の背景とすかし模様になる故に美しいが、自らの個性を持っていない。『ソドム』後半及びパリ生活では、「牝猫、牝犬のように」、「若い獣のように」⁽²⁹⁾などと、主人公のペット的な存在に成りはてる。眠れる彼女は、植物に変身し、美の Paysage となる許り。

二人は決して tutoyer しない。ていねいな呼び方故に存する、へだたりは、かくれん坊する二人の距離だ。常に鬼である「私」の手に、彼女の真の姿がつかまるはずはない。行進する乙女らのグループが、始め、海のかもめの群にたとえられたように、囚われの女はかもめの如く、自由の海へと逃げ去る。間接的ながら窓を開かせたのは、むしろ、

主人公の意志である。「私」に訪れる真の啓示のためには、アルベルチヌの死すらごく必然的であった。

プルーストの同性愛趣味故に、Albertine を彼の秘書だった Albert の名の女性化であるとか、同性愛の経験を異性愛におきかえたとの評は愚かしい。

スワン夫人のモーヴ色と共に、むしろアルベルチヌの存在は、プルーストの暗黒面、母に対する償罪観念とか、性的な苦悩を秘めており、話者はアルベルチヌとの愛の不毛を断ち切ることによって、創造能力の欠除をのりこえようとしたといえよう。⁽³¹⁾

(iii) 美的イメージ

プルーストの美しい世界を彩る、一つの系列は、自然界(特に植物)が女性や衣裳(布地)で装飾される点にある。さんざしの白い蕾が、花嫁の裳裾をつけ、梨の木は白しゅすに粧に包まれている。日射しはアネモネの花や、ピロードや紗に、女性の髪が絹の輝きや、ヒヤシンスの花にたとえられる。⁽³²⁾ この魔術的なデザイナーの手にかかると、グロテスクな物すら優雅になる。「私」の手は、「毛ばった縞子みたいな手」であるし、毛虫も「ピロードの着物」をまとっている。⁽³³⁾

肌ざわりのよい布地などの、対象をやわらかく包む装飾は、プルーストの「女の世界」に満ちあふれ、宝石や花のイメージと共に、気品とプレシオジテをただよわせている。

『失われた時』の持つ、ぬるま湯につかった雰囲気をも D・H・ローレンスは「水ジェリー」にたとえて罵倒した。一方レベッカ・ウェスト女史はこの作のもつ、もどかしさを「桃をつかもうと伸ばした、ピロードの手袋の手の緩慢な動き」にたとえた。⁽³⁴⁾ どちらも柔かい甘さがプルーストのイメージの根本にあることを示している。

3. 「私」の精神構造

「私はゲルマント家について、社交人のもの慣れた調子で、ではなく、社交界に大属縁遠い人のびっくりしたような調子で語った」。

(プルーストからリュシアン・ドーデ宛書簡第二十九信)

上の文に見られるように、主人公は、生へのスタートラインに立つ者として設定され、その性格はナイーブであり、デリケートである。世界はまず自然、女性、場所を示す名前によって彼の想像力をゆりうごかす。「未知の女」「新しい土地」「神秘的な名前」、「異国の……」等の形容詞がこの長篇の前半、『スワン』『乙女』で頻般に用いられる。

『ジャン・サントウイユ』『サント＝ブーヴ反駁』にも共通する重要な比喩の一つは、子供、学生(受験生、新入生)、少女等の世慣れなさ、差恥心、不器用さ、罪人の臆病さ、の喩えによって、自意識過剰の主人公(及び何人かの作中人物)の心の動きや動作

を巧みに写し出す点にある。

「ゲルマント公爵夫人が通りかかる瞬間には、私は罪人のようにびくびくしていた」。 *je tremblais comme un coupable au moment où elle passait.*

[M. de Charlus]……*était intimidé comme un collégien qui entre pour la première fois dans une maison publique . . .* ⁽³⁵⁾

「顔を赤くし」、「胸をドキドキさせ」「おずおずしている」処女さながらの主人公は時に、可愛いらしい。

だが、社交界の描写に際して、「私」の姿はほやけ、カメラ・アイとなって、サロンの人々の会話、動作、感情をドライに、従って、コミックに写しだす。特に『ゲルマント』『ソドム』における、サロンでの主役はシャルリュス氏に変わる。

「私」の内面（真の気持）と外見（会話、態度）は時に裏腹である。乙女達に紹介されたいのに、近寄らず、傍見の真似をする際。アルベルチーナが消え去ったと聞かされ、失望と驚きを抱きながらも、召使いのフランソワーズに強がりという場面。内と外とが矛盾する「私」には厭らしさがある。女中が「私」を評している「鳥、蛾、蛇、リス、お殿様」の言葉は自虐的であり、作者の自己嫌悪を示している。⁽³⁶⁾

リュシアン・ドーズ及びビベスコ王女は、それぞれの回想録の中で晩年のプルーストが人間を軽べつしていたと述べている。こうした非情な迄の人間凝視は、最終巻の「ゲルマント太公夫人のマチネ」に見られる。そこには死神にとりつかれた群像の輪舞がある。⁽³⁷⁾
「墓へ向って駆け出す」「葬式の食卓」「喪の菓子」等の表現にはコミックであるため、一層、残酷な効果がかもしだされる。⁽³⁸⁾

Ⅱ. 『サント＝ブーヴに反駁す』に於ける宝石とラスキン

『失われた時』に発展する草稿には、宝石のイマージュの例が花、女性の比喩に比べて甚だ多い。初期の二作品では少く、二十才以前の詩を含めても詩以外では余り使われていなかった。

「月光に手織られた奥深い谷は、オパールの萼」 (p. 72)

「(ゲルマント) 伯爵夫人は絹、まなざし、真珠のオパールのような、そよぎを車の中に入れるのだった」 (p. 93)

「ゲルマントの館は、もろく澄み切った水晶体の長方形」 (p. 269)

「ゲルマント夫人の眼は、サファイアの先をあなたの上に押し当てるようだった」。

(p. 271)

「ガーネット色の頬をし、アメシスト色の頬骨のゲルマント夫人」。(p.271)

目立つ文を拾うと、ゲルマント家、夫人に関するもの許りになったが、多少意識的に貴族のアクセサリーとして、貴金属を装飾したのかも知れぬ。デュアメル『天上生活回想』を連想させる程、宝石の数が多い。宝石の比喩がラスキンスの影響である事は既にアンドレ・モロワが『伝記』で一言述べている。⁽³⁹⁾どの程度、両者間に相互関係があるか調べてみよう。

「サン・マルコ寺院の正面玄関の真珠、サファイア、ルビーについてラスキンが語ったのだが」。(p.270)

「母はヴェニスについてのラスキンの絢爛たる描写を私に読むのだった、その描写をインド洋の珊瑚礁とオパールとにかわるがわる比べながら」(p.122)

ラスキンの文とは『ヴェニスの石』を指す。マリー・ノドリンガーの回想によれば、マルセルと彼女の二人はサンマルコ寺院でラスキンのこの場所についての描写を、熱狂して読み合ったという。

⁽⁴⁰⁾ラスキンの横作『猪の祝福』の一文「私の家は碧玉とトルコ石とで造られるだろう」は『ヴェニスの石』二巻(第四章サンマルコ)p82「めのうが敷かれた小さな教会堂」という文を真似たのであろう。p86「実際柱頭は大きな宝石に他ならない。大きなエメラルドやルビーのように、その型と華麗な色彩によって価値づけられる貴重な蛇紋石か碧玉の塊に他ならない」。等、この章の前半では他にも、碧玉を多く使ったり(p.71、p.86に2つ)、宝石の比喩をラスキンは多く用いている。

ラスキンを讀んだブルーストはヴェニスを宝石の都と思いこんでいた。実際に訪れて、幻滅を感じたようだが(G・ペインターによる)⁽⁴¹⁾描写の際には宝石で装飾した。

ヴェニス p121「店先の織物が投げる影はサファイアのかけり」。「この大運河の宮廷がもはや太陽の黒いダイヤモンドではなくなった現在……」「日に照らされた街路は私の眼差しが憩える程、柔かく、逆う色彩をもつあのサファイアの拡がりであった」。

『スワン家』の主人公が憧れるヴェニスの描写は(「インド洋のさんごの暗礁のような紫水晶の岩々」(「碧玉の壁をめぐらしエメラルドを敷いた大理石と黄金の都」)⁽⁴²⁾更に主人公が実際に訪れた「ヴェニスの街路はサファイア色の水上にある」。⁽⁴³⁾

最初の例を、ペインターの指示に基き『ヴェニスの石』二巻第一章を調べると、p9「インド洋のさんごの二つの岩」とあるのみで、「エメラルド」の語はない。しかし碧玉、エメラルドは何回が使われている語い故、ブルーストの思い違いで括弧をつけたのではないか。即ち「エメラルド」の語の追加はラスキンからの影響をはからずも示して

いる。第二の文は第二章「サンマルコ寺院」には見当たらない。全三巻を読んでいないが、推察する所この文もラスキンの模作文ではないだろうか。

Ⅲ. 『ジャン・サントウイユ』

A. 温感（触覚）

この作に到ると温感の語いは「寒い Froid」「暑い Chaud」が増えてくる。しかし「寒さ」の語は質的に重要ではない。

「暑さ、暖かさ」の形容は、「熱い牛乳、ブドー酒、スープ」等食欲の喜び、「暖かい部屋、ベット、湯たんぽ、暖炉の火、ランプ、ろうそく」など、暖かみの数多い例のいずれも、主人公ジャンの心の喜びに結びつく。『楽しみと日々』で燃え立っている情欲の火は、この作では、静かに燃える暖炉の火に昇華し、サントウイユ及びその友人レヴェイオン両家の静かな、平和な暮しを象徴する。

柔かさは「ピロードのように柔かいサイネリアの花」⁽⁴⁴⁾「白い柔かいハンカチの重なり」等、花、布地に形容されることが多い。この柔かさは、固さに対比され、主人公の心の状態を示す。「母の柔かい黒ピロードのコートの匂いと触感」⁽⁴⁵⁾は、父母といさかいをした、ヒステリー気味のジャンの心を和らげる。だが、母のマント、レヴェイオン公爵夫人のコートを好んで着るジャンは、その柔かさにスポイルされている面がある。

固さと柔かさは見知らぬ部屋への違和感、或は親近感を浮きぼりにする。

（ベグメイユのホテル）「鏡の固さの中に映る洗面所の大理石は、皮肉な笑みを浮べていた」⁽⁴⁶⁾。（ドン・シュールのホテル）「だだっぴろくない壁、高すぎない天井は、手にふれれば柔かそう」⁽⁴⁷⁾。柔かさには抵抗感がない点が、主人公に喜びを与える。物の方が主体になって、友人或は召使のように、ジャンの心に仕える。

諸感覚の内、温感（触覚）以外に重要なのは、光、音、匂いであろう。「静寂、沈黙」の語いは、巻を追う毎に増加する。「絶対の沈黙」⁽⁴⁸⁾（三度は使われている）。「何かを犯すような気がする沈黙」⁽⁴⁹⁾「花の上にとまった蝶の呼吸が聞える程の沈黙」⁽³⁰⁾。「沈黙」の語を浮き立たせるための、力んだ大げさな形容がなされる。『失われた時』では「沈黙の青色の表面」と形容の仕方に余裕と工夫がある。植物園の花々の静けさ、谷間の静寂。ここにはサロン生活の雑音を避けて、自然と合一しようとする孤独な魂の動きが感じられよう。めぐりくる季節の移り変りが生き生きと描かれる。太陽は Comme であらわされる比喩の内、非常に多く、その「嬉しそうな光」はジャンにとっての幸福の約束である。

B 比 喩

植物（自然）を女性或は衣裳にたとえる例が非常に多い点に、美しく繊細な比喩の芽生えがみられる。

植物を女性に。「金蓮花、リラは水浴後の女に」⁽⁵¹⁾、「椿は末知の美人に」⁽⁵²⁾、リラは更に「美女、シェラザード」⁽⁵³⁾に喩えられる。

花を衣裳に。「リラの白い花は白サテン」⁽⁵⁴⁾「アップリケをしたヒヤシンス、おだまき草」⁽⁵⁵⁾「絹の旗のような花、鉄線花」⁽⁵⁶⁾「絹のように柔かい白いショールをまとったベンガルのつるばら」⁽⁵⁷⁾、「すがすがしい着物、或は絹モスリンのリラの花」⁽⁵⁸⁾、「晴着という花のドレスを着たローデ夫人」⁽⁵⁹⁾。

自然を衣裳、布地或は女性に。

「白い可愛い晴着をつけた果樹」⁽⁶⁰⁾、「夜の着物のリンゴの木」⁽⁶¹⁾、「ちょっとずつ様子の違う椿の木々は異った妊婦達」⁽⁶²⁾、「日に照された芝生は熟睡した女」⁽⁶³⁾、「絨毯の様に柔かい芝生の頬」⁽⁶⁴⁾、「女の白い帽子のようなナプキン」⁽⁶⁵⁾、「晴日目の日の蝶は、けげげしい絹の粧いで外出する女」⁽⁶⁶⁾、「日光というしゃれた上衣を着て歩くジャン」⁽⁶⁷⁾、「空はドレスのように冷たく輝き、退屈に思えた」⁽⁶⁸⁾。

特にリラは何度もヒロインのように現れる。植物の描写に女性及びその衣裳の連想を用いる事によって、かなりソフトなムードを生みだし、詩情豊かではある。が、女性への憧憬が対象の見出せぬまゝ、木々や植物に転化されている。今は人物画（特に女性）が描けず、静物画、風景面にいそむ時期と言えよう。

女性を花にたとえた例は僅か一つのみで、『失われた時』とは甚だ異なる。「あなたにあげるのではない花＝レヴェイヨン公爵夫人」⁽⁶⁹⁾。

植物を女性、或は衣裳にたとえる作家はジャム及びリルケ等の詩人達が大勢いる。が、プルーストの場合、そのたとえ方の度合が極端に多く、上品な色っぽさに富むのが特色である。但し、この作品の植物の描写は『失われた時』での描写ほど精密ではない。

又、可愛いらしく、子供っぽい連想ゲームによって、対象はしばしば美化される。「はえは昆虫の中の雀」⁽⁷⁰⁾「孔雀は植物界の虹色のリラ」⁽⁷¹⁾「フクロウは高慢な王子」⁽⁷²⁾、「蜂、蝶、は思いがけぬ客」⁽⁷³⁾。「雲はパンジイ色をした空の客」⁽⁷⁴⁾。「風は森の番人」⁽⁷⁵⁾。「さくら草、白い雲は帆船」。

C. 付 記

M. Blanchot も「純粹物語の失敗」⁽⁷⁶⁾と名付けたように、この作品は、主人公の成長が「教養小説」的でありすぎ、魅力あふれるヒロインもいず、物語の各編が中途半端で有機的な関係をもたない。鏡に映るジャンのマスクは常に美しく、為に自己満足に陥る。

王子でありたい一つの夢が描かれ、花好みも色好みの代理経験でしかない。王子に連れ
そうのは、美しい花のみ。植物、シーツへの呼びかけ、Ah、Oh、等、感嘆詞の連発に
も自己満足的な、ナルシズムが現われており、ジャンは甘えっ子の自分自身から脱却出
来ない。時々あらわれる語り手でさえ、ジャンの若さを是認している。だが土地、時
間、眠りの印象についての鋭い感覚の働きは、構成の進歩と共に『楽しみと日々』より
顕著である。

註 A la Recherche du temps perdu (La Pléiade) の略語は R.T.P. I-III.

- (1) R.T.P. III, p.249.
- (2) Ibid., I, P.43.
- (3) Georges Poulet : L' Espace proustien, n.r.f, 1963, p.22 : " lieu qui alors semble abso-
lument *perdu* dans la solitude de l'espace".
- (4) R.T.P. III, p.125, et I, p.380. 他に男の顔の déformation II, p.846-847.
- (5) Ibid., III, p.762.
- (6) Id., II, p.205.
- (7) R.T.P. I, p.419.
- (8) R.T.P. I, p.168 et III, p.801.
- (9) John Ruskin : The Stones of Venice, Dana Estes and Company, Boston.
- (10) cité par Constanza Pasquali : Proust, Primoli, La Moda, Ed. di storia e letteratura,
1961, p.81. cfr. Albert Feuillerat, *Comment Marcel Proust a composé son roman*,
Yale Romantic Studies, VII, New Haven, 1934, pp.30-40.
- (11) R.T.P. I, p.965-966.
- (12) C. Pasquali, op. cit, P.63-88 (Personaggi Proustiani : Madame Swann et i suoi vestiti)
- (13) Correspondance générale de Marcel Proust, IV, Plon, p.124.
- (14) Lucien Daudet : Autour de Soixante Lettres de Marcel Proust, n.r.f 1928. cf. 「プル
ーストが女性の衣裳について可能な限り表現を追求したのは、オデット・スワンについてであ
る。」 Juliette Monnin-Hornung : Proust et la peinture, Droz, 1951, p.160-161.
- (15) cité par Michel Butor : Histoire extraordinaire, n.r.f. 1961, p.81.
- (16) R.T.P. I, p.637. スワン夫人の散歩姿のイマージュとして C. Pasquali は E. Manet の Le
Printemps (portrait de Jeanne Demarsy, 1881) の単色写真を添えている。
- (17) R.T.P. III, p.950.
- (18) Germaine Brée : Du temps perdu au temps retrouvé, " Les Belles Lettres ", 1950,
p.98.
- (19) R.T.P. I, p.621.
- (20) Ibid., III, p.103.
- (21) M. Proust : Lettres à sa mère, Plon, 1953. p.172 etc.
- (22) R.T.P. I, p.221.
- (23) R.T.P. I, p.636.
- (24) 棒線グラフによる。Georges Matoré : A propos du vocabulaires des couleurs, Annales

de l' Univ. de Paris, juin 1958 p.137-150.

- (25) M. Proust : *Lettres à N.R.F.*, 1932, p.253. : " mon prochain volume ; *La Prisonnière* est tout à fait romanesque."
- (26) F. Mauriac : Proust, Marcelle Lessage.
- (27) G. Brée, op. cité, p.196.
- (28) R.T.P. II, p.1055.
- (29) Ibid., III, p.1019.
- (30) Ibid., I, p.788.
- (31) cf. Michel Butor : *Répertoire II*, (Les oeuvres d'art imaginaire chez Proust), Ed.de Minit, 1964, p.259 : "Quant à la couleur mauve, caractéristique de l'époque, de l'art 1900, elle a alors une signification toute particulière, couleur de l'ombre, — couleur de ce qu'on ne voit plus, de l'indicible, ..." p.290. Le spectacle de tout désir féminin, occasion d'infidélité à la mère, inspire d'abord à Proust une horreur, une angoisse dont l'« indicible » est si bien traduit par la couleur mauve du catleya, tellement liée, mais tellement opposée au blanc des aubépines et du mois de Marie.
- (32) R.T.P. I, p.953. II, p.155. etc.
- (33) R.T.P. I, p.882, III, p.861.
- (34) cité par J.M.Cocking : *Marcel Proust (Three Studies in Modern French Literature Yale Univ. press. 1960) 1956, p.123.*
- (35) R.T.P. II, p.144 et p.906. par ex. Jean Santeuil I, p.278, *Contre Sainte-Beuve* p.250, etc.
- (36) R.T.P. II, p.846-847.
- (37) L. Daudet, op, cité, p.43. *La Princesse Bibesco : Au bal avec Marcel Proust*, Plon, 1928.
- (38) R.T.P. III, p.980, 998, 999.
- (39) André Maurois : *A la Recherche de Marcel Proust*, Hachette, 1949, p.111.
- (40) M. Proust : *La Bénédiction du Sanglier*, «N.N.R.F.», Oct. 1953.
- (41) George Painter : *Marcel Proust, a biography*, Chatto and Windus, London, 1959.
- (42) R.T.P. I, p.393. 392.
- (43) Idid., III, p.624.
- (44) Jean Santeuil II, Gallimard. p.155 et p.53.
- (45) Ibid., I, p.309.
- (46) id., II, p.176.
- (47) id., p.280.
- (48) id., II, p.218. p.243. III, p.269.
- (49) id., II, p.243.
- (50) id., p.41.
- (51) id., I, p.149 et II, p.11.
- (52) id., I, p.209. «[Jean] restait là devant [le camélia] comme devant une dame étrangère, belle, merveilleusement vêtue...»
- (53) id., III, p.158. I, p.196.
- (54) id., I, p.138.

- (55) id., p.186. «des jacinthes., de larges ancolies apposées... comme des appliques...»
- (56) id., p.164.
- (57) id., p.187.
- (58) id., p.190, p.197.
- (59) id., p.232.
- (60) id., p.167.
- (61) id., II, p.259. «les pommiers., prenant eux aussi leur vêtement de nuit,...»
- (62) id., I, p.209.
- (63) id., II, p.46.
- (64) id., p.277.
- (65) id., I, p.154.
- (66) id., p.151. «Des papillons... comme ces femmes qui sortent dans la rue habillées de soies claires et vives...»
- (67) id., III, p.160.
- (68) id., II, P.57. «le ciel lui avait paru quelque chose de froid, de brillant, d'ennuyeux comme une robe, ...»
- (69) id., I, p.285.
- (70) id., I, p.163.
- (71) id., II, p.328. «deux hiboux, princes dédaigneux de la région...»
- (72) id., p.326. «des hôtes plus indiscrets... un papillon, une guêpe...»
- (73) id., III, p.159.
- (74) id., II, p.335. «ce bon vent... comme un bon forestier...»
- (75) id., p.328 et p.50. «De légers nuages blancs... comme des voiles...»
- (76) Maurice Blanchot : Le livre à venir, Gallimard, 1959, p.27. «l'échec du récit pur»

[1964 年 9 月]